

1. Borobudur（ボロブドゥール遺跡）に関する概要

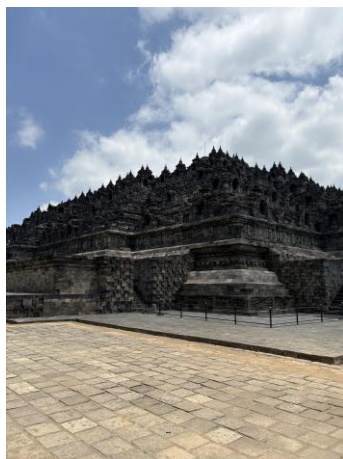
ボロブドゥール遺跡は、ジャワ島中部のケドゥ盆地に位置する大規模な仏教遺跡で世界的な石造遺跡である。世界最大級の仏教寺院であり、1991 年に世界遺産 No.592 のボロブドゥール寺院遺跡群の一部としてユネスコ世界遺産に登録されている。

インドから東南アジアに伝播した仏教は一般的に部派仏教（上座部仏教）であったが、ボロブドゥール遺跡は大乗仏教の遺跡である。

ボロブドゥール遺跡は、中部ジャワの中心都市ジョグジャカルタの北西約 42km、首都ジャカルタからは東南東約 400km に所在し、巨大なムラピ山などの山々に囲まれた平原の中央に立地する。遺跡総面積はおよそ 1.5 万 m² である。高さはもともと 42m あったが、1992 年に落雷したことにより頂上の石が破損したため、現在は 33.5m になっている。どの部分が破損したのかに関する明確に記された公式的な文献は確認できなかったが、頂部のチャトラ（傘石、塔頂の装飾構造）が落雷により欠損したのではないかという説が濃厚である。2010 年には、ムラピ山の噴火による火山灰で被害を受けた。

仏像は、第一回廊から第四回廊のくぼみに 432 体、3 段の円形壇の上に築かれた釣鐘状のストゥーパ 72 基の内部に 1 体ずつ納められており、いずれも一石造りによって等身大につくられ、計 504 体を数える。

遺跡に入場する際は、遺跡保護のために指定の履物（ウパナト）を履く必要がある。このウパナトは、かつて天皇も履いたという。この履物は地元住民が製作しており、地元の経済の活性化にも繋がっている。



ボロブドゥール遺跡全体の様子（左）と入場の際の指定の履物（右）

2. 歴史的背景

シャイレーンドラ朝は、8 世紀半ばから 9 世紀にかけてオーストロネシア系の民族がジャワ島中部に建てたとされる王朝である。シャイレーンドラはサンスクリット語で「山からの王」という意味であり、インドシナ半島の古代王国扶南の「プノン」（山）と何らかの

関係があるのではないかという推論も唱えられている。この王朝の成立経緯については、シュリーヴィジャヤ王国が8世紀半ば以降にジャワ島中部に進出したという説と、ジャワ王家でシュリーヴィジャヤに君臨した王朝であるという説があり、詳細はいまだ不明である。シャイレンドラ朝の王、サマラトゥンガ王の命を受けて、ボロブドゥール遺跡は建設された。

3. 各スポットの説明

①三界の思想

ボロブドゥール遺跡の構造は、仏教の三界を表しているとされている。1階と2階が「煩悩（欲界）」、3～7階は「解脱（色界）」、8～10階は「天国（無色界）」である。つまり、下から、基壇は人間のいる欲界、その上は神と人間が触れあう世界である色界、さらに、その上部が神のいる無色界である。すなわち、悟りをめざす菩薩の修行を表現しているとみなすことができる。

(1) 煩悩（欲界）について

最下層の1階には、「カルマヴィバング」と呼ばれる複数のレリーフがある。基壇においては、「分別善悪応報経」が160面のレリーフに彫られており、衆生の日常生活を描写しながら因果応報の教えが説かれている。

このレリーフの一部に「ウィルパ」と呼ばれるものがある。これは、サンスクリット語で「醜い形」という意味を持っており、女性の醜い姿の象徴である。つまり、女性が噂話をしたり、ゴシップを流したりする様子が醜いことを表現している。生まれ変わったら、猿のような醜い顔になるとされている。



ウィルパ全体の様子（左）と猿のような顔の女性の様子（右）

右の写真のレリーフの上部にはカウイ語で「悪い顔」と刻まれている。

ウィルパの横には、男性の醜い姿を描いたレリーフがある。男性の醜い姿とは、酒に溺れる、盗みを働く、女遊びに耽る、麻薬や博打をするなどの行為を指している。男性には

生まれ変わりの際の罰はない。



男性の醜い姿のレリーフ

これら2つのレリーフのさらに横には、善行を表すものが彫刻されている。善行とは、貯金をするを子供に教えたり、ジャモという漢方薬を調合して病気を治したり、マッサージをしたりすることを指している。



善行を表すレリーフ

(2) 解脱（色界）

この階層には、お釈迦様の生涯を描いたレリーフが存在している。プラダクシーーナとは、ヒンドゥー教や仏教で用いられる時計回りの礼拝方法のことであり、この解脱の階層ではプラダクシーーナに沿ってレリーフを見て回することで物語が繋がるようになっている。

釈迦の誕生を描くレリーフがある。これには、スルレラ王とマヤ夫人のお話が描かれている。2人は結婚したものの子供恵まれずにいたため、祈りをささげていた。するとある日、マヤ夫人は、自分のからだの中に白象が入り込むという夢を見る。そして別日には白

象が黄色い象に変化した。マヤ夫人はこの夢の内容をスルレラ王と占い師に相談し、その後2人の間には子供が生まれた。マヤ夫人は、出産のための里帰りの途中のカピラヴァストゥ郊外のルンビニで子を産んだ。この子供が釈迦（＝ガウタマ・シッタールタ）である。白象に化して母のマヤ夫人の体内に宿り、産みの苦しみを与えないためにマヤ夫人の産道を通らず右の脇腹より生まれ出たとされている。そして生誕した釈迦は、七歩歩いて右手で天を指し、左手で地をさして「天上天下唯我独尊」と宣言したとされる。釈迦が7歩歩いたあとには、7本の蓮の花が咲いたと言われている。釈迦は、生誕時には過去世の記憶を保っており上記の宣言をしたが、その後普通の人間と同じく過去世の記憶を失った。



釈迦の誕生を描いたレリーフ

また、この階の壁には石像が置かれている。この石像には、仏頭がある。仏頭をオランダ政府が持ち帰ったという過去があるため、仏頭がある仏像は228個しかない。そのため、仏頭が現存している仏像は非常に珍しいものである。この仏像の手のポーズは、「地球を触る」という意味がある。



仏像の手の形には、それぞれ異なる意味がある。右手を下に向けたポーズは「地球を触る」という意味、右手を上に向けたポーズは「めぐみ」、両手の手のひらを上に向けて重ねたポーズは「瞑想」、右手を正面に向けたポーズは「静か」、右手の親指と人差し指で輪を作るポーズは「教える」、右手と左手の親指と人差し指で輪を作りそれらをつなげたポーズは「ダルマ」という意味が各々込められている。



「地球を触る」(左)



「めぐみ」(中央)



「瞑想」(右)



「静か」(左)



「教える」(中央)



「ダルマ」(右)

また、同じくこの階層のレリーフには、動物をモチーフとした物語も存在する。このレリーフには、ウサギ、獅子、マングース、サルが登場する。ウサギ以外の動物には、神様から様々な頂き物があった。(果物など)しかし、ウサギのもとには全く頂き物がなかったため、ウサギは自らの命を絶ち神にささげた、という内容が描かれている。



神から頂き物をする動物たち（左側）と自ら命を絶つウサギ（右側）の様子

(3) 天国（無色界）

この天国（8～10 階）にはレリーフが存在しない。ここは、欲望も物質的条件も超越し、ただ精神作用にのみ住む世界であり、「禅定」になっている世界である。

ここには、8 階に 32 個、9 階に 24 個、10 階に 16 個、そして最上部に 1 個で、合計 73 個のストゥーパがある。「73」という数字は、「 $7+3=10$ 」になる。ボロブドゥール遺跡自体も 10 階建てになっており、建設者は「10」という数字にこだわりを持っていたのではないかと考えられている。仏教では、「10」は「完全」「到達」「円満」を表す象徴的な数字であり、十波羅蜜という菩薩が悟り（仏果）に至るために修める 10 の徳目が存在する。内容は以下の通りである。

1. 布施（ふせ）
2. 持戒（じかい）
3. 忍辱（にんにく）
4. 精進（しょうじん）
5. 禅定（ぜんじょう）
6. 般若（はんにゃ）
7. 方便（ほうべん）
8. 願（がん）
9. 力（りき）
10. 智（ち）

ボロブドゥール遺跡は人間界→修行の道→悟りへ至る曼荼羅的立体表現となっているため、この十段階との対応を示唆する説も考えられている。

ストゥーパにはひし形の穴が開いており、四角い形は「安定」を表している。全てのストゥーパに仏像が入っているが、最上部の最も大きなストゥーパには入っていない。（現在は、博物館に置かれている。）これらのストゥーパのうち、東西にある 2 体の仏像はスト

ウーパから頭が出ている。2体の仏像は、それぞれ表情が少しずつ異なっている。穏やかで優しい表情をした仏像が西向きにあり、仏頂面の仏像が東向きに建っている。



見学用に露出した仏像（右は穏やかな表情で、左は仏頂面）

ストウパの造りは、上から「杖」、「茶碗」、「蓮の花」、「蓮の葉」、「地面」を表現している。以下の写真（右）では、青色の丸で囲んでいる部分が上から「杖」、「茶碗」、「蓮の花」、「地面」に該当する。これはガイドを担当してくださったニイタさんによる説明である。これに近い説明は、多数のガイドや旅行記事に見られるが、学術的な一次文献でそのまま同一表現を示すものは確認できなかった。信頼できる公式的な解説や学術論文は「曼荼羅的構成」「蓮の象徴」「三界」などのより一般的・概念的な説明をしており、ニイタさんの説明はそれをわかりやすく具体化した口頭説明であった可能性が考えられる。



ストウパの写真

頭が獅子（ライオン）の形をした守護神（門番）が設置してある。獅子は、仏教では「高貴さ、力、仏陀の教え」の象徴とされている。日本でいう狛犬と同じ役割をしている。当時、ライオンを見たことがない現地民が想像でライオンの頭を製作したとされている。

る。獅子の頭だが、顔が猿に似ているのが珍しい。



獅子の形をした守護神の石像の様子

4. まとめ

かつて、王国の反映と共に築かれ、一時は人々から忘れ去られていたボロブドゥール遺跡だが、現在では世界中からたくさんの観光客が訪れ、歴史と文化を語り継ぐ重要な遺産となっている。実際に現地を訪れ、ガイドの方から詳細な説明を受けたことで、文字や写真で学んだ知識がより立体的に理解できた。

長い歴史の中で、風化や自然災害などの破壊の危機にさらされながらも、多くの人が携わりながら修復や保存の努力がなされ、今日まで守られてきたことを実感した。ボロブドゥール遺跡は過去と現在を繋いでいる非常に重要な遺跡であり、人類共通の財産として守り継がれていくべきだと強く感じた。